

三河 アララギ

2021年 1月 睦月 むつき

新 年 号

第 六 十 八 卷 第 一 号



ニューヨーク日記(171) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

JOSHUA TREE

Blue Shoe Diaries



アメリカでコロナ禍の今、殆ど外に出ないで過ごしていたけど何処か行くとしたら自然しかないでしょ。と言うことでカリフォルニアの砂漠のジョシュアツリーに行ってきました。都会っ子なので意外な行き先で心配だったけど行ってみたら不思議感たっぷりで予想以上に面白かった。夜までいなかったけど夜空は星満点で凄いらしい、昼間でも十分宇宙っぽい感じだったけど次回は夜も過ごしてみるかな？

During a pandemic, if you want to go somewhere, you have to go to nature, the big outdoors. So we went to the desert in Joshua Tree. Completely out of character for me but surprisingly pleasant! We didn't spend the night in the desert but rumor has it that the night sky is out of this world. Daytime felt out of this world already so maybe next time?

目次

第六十八巻第一号(通巻八〇五号)

表紙・ゆり根	今泉 由利(1)	鈴木美耶子(24)	木村 歩歩(34)
ニューヨーク日記(17)	Blue Shoe(2)	吉見 幸子(24)	今泉 如雲(34)
アカンサスの徑	御津 磯夫(4)	牧原 正枝(25)	岩崎あつ子(35)
三河アララギ歌集Ⅶ	大須賀寿恵(5)	森 厚子(25)	今泉 由利(35)
歌集「續々草々」	今泉 米子(6)	山崎 俊子(25)	かさね吟行会
ははきくさ	河原 静誠(7)	三田美奈子(25)	『酔いの徒然』(105)
百花繚乱	岡本八千代(8)	東洋大学	楽しい時間(98)
持統帝	弓谷 久子(10)	LETHA(26)	絹の話(122)
注連縄	今泉 由利(12)	王 有成(26)	本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬
羽二重餅	安藤 和代(14)	岳 美汐(26)	「江上浩二の独り言」
娘の手を	清澤 範子(15)	曹 偉(26)	漢詩研修(五十一)
覚でる	伊藤 忠男(16)	(27)	太陽系惑星起動
火の用心	矢崎 直人(17)	三浦 奏愛(27)	懐古園に遊ぶ
冬気配	森岡 陽子(18)	塩田 通子(27)	旅
「君が代」	白井 信昭(19)	石垣 茉生(27)	芭蕉と子規4
芋納豆	杉浦恵美子(20)	森岡 陽子(28)	「氷魚」のことから(240)
宇宙船	阿部 淑子(21)	高橋 育郎(30)	岡本八千代(57)
米袋	山口千恵子(22)	松本 周二(32)	編集室だより(二〇二〇年十二月)
去りて来たりて	夏目 勝弘(23)	山元 正規(32)	今泉 由利(58)
『ことよせ』	いーはとぶ	森岡 陽子(32)	野菜・果物・まんだら(35)
		田中 清秀(33)	「三河アララギ」について
		浜田 紀政(33)	(60)
		植村 公女(34)	
稲吉 友江(24)			
牧原 規恵(24)			
水野 絹子(24)			

アカンサスの徑

御 津 磯 夫

片言に三ヶ国語を話すころまだぢぢの国に来る日を待つ

羽田よりとびゆく夜のジャンボ機よ汝らハイジャックなどに逢ふなよ

よみがへり来るを信じて幾月かわれを待ちたりわれの患者は

いつのまにわが齡七十になりたるか幾度病みて死をまぬがれて

まだ生きてゐるかもしれないぬ枯れ枯れののこる鉢にも折々の水

抜き捨てし鉢の形の土塊の日にすこしづつ角崩れゆく

二度三度ほとほとわれは死にしかば今の現に心甘ゆる

何年になるかと数ふることもしせず柳の花を見にゆきもせず

袴青き細々土筆ひとつかみ庭より採りて今宵の饗とす

助けられし命をもちて助けゆかむわれを慕へるわれの患者を

三河アララギ歌集Ⅶ

大須賀寿恵

君等二人の夕餉の中に割り込みてわれもいただく冷えし素麺

倒されしトマト一面に素枯れつつ赤らめる実の幾万あらむ

事務机に下を団扇であをぎつつかたみに蚊を追ふ居残りの君と

雨漏りをうくる四つの馬穴の中に落ち来る雨のそれぞれの音

統一行動の連絡受けむと急ぐ街招魂祭の花火轟く

だめでしたの一言のみがまた云へず外に出で来ぬ芝の夜の露

寄せ植ゑの鉢の楓の稚きに虫は蓑着てぶらさがるなり

蛙手の枝の先より花キリンの棘に蓑虫うつりゆくらし

寄せてゐしこころやうやくうすれゆく鳴く雀等に諂諛なからむ

「引馬野考」提出依頼のありしと云ふ国会図書館の青銅の門

歌集 「續々草々」

今 泉 米 子

家系など語り聞かせてゐたりけりダイヤ硝子の扉の夕映え

正月の海の渚の貝殻を入れし小箱を垂里は忘れず

それぞれに帰りゆきたり幼らに庭の甘夏柑を摘ます忘れし

屋敷の角曲りゆくとき振りむきてわが幼女子はひとり帰りぬ

正月は忽ちにして賑やかに過ぎし五日は腰の痛まず

雪の如きもの残りゐる庭の隅漬物石を拾ひあげたり

寒椿の花赫々と季長しうとみたのみつ年の変りぬ

アロエの花まだ保ちつつ新しき年となりたる診療はじめ

メタセコイヤの落葉の色の吹き寄りて傘寿の碑暖かに見ゆ

言ふこともなく夜を居りて次ぎ次ぎの花の真白き篝火の鉢

ははきくさ

河原静誠

野ボタンもダチュラも弱き花咲きぬ寒三郎の風寒き軒

吾が山と思ふあたりは跡もなく道深々と自動車のゆく

裏木戸をふさぐ筈なぎ倒し十王堂の仏前に坐す

放生池の浮木の上に今日もまた甲羅を干しをり石亀のむれ

夢見悪しき一日は保育も手につかずけふは独居の伯母を訪ねむ

針灸の治療をうけつつ吾が思ふ健やかなりし保母となりし日

十王堂の庭の石仏苔むしぬ五年の月日みがくことなく

真福寺の谷間にかかる水車米つく音の今宵もきしむ

石仏刻みし友の新盆に其の石地藏を庭にまつりぬ

キニョルもマリオネットも焼け失せぬ今は童話に励まむとする

ひやつかりようらん
百花繚乱

蒲郡 岡本八千代

秋の陀兜囉ダチュラそのまま冬の陀兜囉となりその白花しろはなの百花繚乱

しろじろと南のガラスの窓にまでふれつつ咲くよその白き花

夕さればダチュラ百花の白花しろにわが思ひ出の浮かびくるかな

御津先生文明先生の心こもる白花ダチュラよわれのダチュラよ

美しきダチュラ白花のわがダチュラ今年は春夏秋冬の花

冬庭に佇ちてゐたればめずらしや深空みそら遠くに雁飛行してゆく

いづくにか雁たちは行くわが頭上竿になりつつかぎになりつつ

雁飛行を見るは今年が初めてにて少女の時の心になるごと

雁たちはいづくへ舞ひてゆくのやら恰かも南の知柄ちがらの海の方

本読めば本がわれをばなぐさめてくれる如くに思ふ夜かな

本読めば本が友だちの如くして樂しかりけりこの秋の夜半

わが従姉妹いとこにもらひし紺色の作務衣さむえ着て庭に佇ずむ今日の幸福

曇りなば曇りの空の下に佇つ作務衣を着たるひとりの老女

この作務衣久留米織りなりおしゃれ着よ今日は一日中着てゐる私わたし

庭に佇つわが足元の草々の秋草あはれ冬草となりつつ

持統帝

豊川 弓谷 久子

電気毛布にシーツ掛けをり去年と同じ事繰り返へしつつ霜月となる

はやばやと雪のニュースよ紅葉の上に雪降る景色楽しみて見る

重ね着とカイロの出番か立冬の一日冷たき雨となりたり

十日の市に子の買いて来し無花実も最後の実らしジャムに煮込まむ

石巻の次郎柿貰いぬ自然の味と柿を好みし母思ひ出す

久びさに姪訪ね来ぬマスクのままで近況語りて帰り行きたり

玄関に立てば真向ふ山の峰御堂山なり秋空高し

持統帝の使者はあの山越えたりと御津先生は教えくれたり

大義説く三島由起夫がテレビにうつる壯絶な死が心をよぎる

一むらの庭のアロエに八本の花茎立てりすつくと立ちをり

十月並の暑さ戻りぬ定まらぬ氣候の中にうろたえてをり

車のドア開けてみさとが待ちくるる検診終えて出て来る我を

縁先に鉢並べ置くとりどりの色に咲き初む金魚草の鉢

パンジーとビオラの苗をプランターに子は植えてをり去年の如く

ささやかに生きゐる事を樂しまむ日向の縁に花を眺めて

注連縄

東京 今泉 由利

登りくる朝の光りは一直線水栽培の九条葱の辺

一直に私に来る太陽光一億四千九百六十万キロを

少しづつ明かるみきたる朝の陽に向かひて思ふ仕合わせだ

おおいなる宇宙の内にぼつねんと独り居る時太陽きたり

少しづつ位置の動きて太陽光私の範囲を離れゆきたり

また明日^{あした}明日逢えるを心して残しゆきたる温もりに居る

ぐるぐると渦巻き^そ初めて事始めぐるぐると今の宇宙に

一つ一つ思ひ出もてり思ひだす私の一世に集まりし物

温もりの伝ひきたりてほのぼのと私の全身整ひてゆく

カイロとは「手」プラクティックは「技術」にてひととき居りぬギリシャ語の内

目に見えぬ黴菌群の漂ひに研ぎ澄ましをり全身全霊

裏庭の松と裏白と取り揃へ門松かざりき祖父と一緒に

まっ白く湯気たち込めてお餅搗き杵^{きね}振り上げる祖父の面影

長く長く外つ国にをりしこと今年いただく茲姑のお節

父と母と続き続ける^{しるし}印にて新藁香る注連縄とどく

羽二重餅

豊川 安藤 和代

孫の土産羽二重餅はやわやわと舌に心に甘くとけゆく

入りつ陽が弓張山脈染めてゆく黄昏の時母の声する

夫逝きて二度目の秋よ遠く見る石巻山の灯チロチロうるむ

えんどうの芽生え五日目細ほそと冷やかな風に素直になびく

ラジオ派の私の好きな深夜便藤原竜也のトークがよろし

「オールインワン」そんな言葉に魅せられて買ってしまったクリームひとつ

駅伝の駒沢東海青山と応援す吾れも力わきくる

コロナゆえ落ち込む心千両は日毎色増し慰めくるる

ひつじ田は広びろとして静もれり黄昏時よ遠く犬なく

若き日の上司の名あり叙勲欄受話器にぎりて「おめでとう」言う

朝末きひつじ田広くしづもりて刈草の香のかすかに流る

娘の手を

春日井 清澤 範子

暑かったり寒かったりの朝なるも小鳥は庭でチチツと鳴きぬ

朝夕の寒暖激しく着替する吾が体の調子くるゐぬ

庭の植木モツコクの木も暑き日照りに枯葉目立ちぬ

一度仕まいかけたる吾がパジャマケースより出し又着替える

唐あげの好きな娘に体脂肪気をつけながら今夜の献立

正月の用品と思えど巡るスーパーにゆり根出ており茶わん蒸しに良し

心不全の診察を受け二度目の入院夫八十九才コロナの中に

わが気持穏やかならず娘を頼りに夫の替着の準備

病室に入ることも出来ずコロナの入院涙流るる

吾ヘルニアになりゐて夫の入院用品をまとめるも娘の手をかりさつさと揃ふ

賞でる

大阪 伊藤 忠 男

山肌赤く染めたる満月の言葉失う美しさなり

沈みゆく夕日輝く秋の空独り占めするこの時の時

特別の年を乗り越え流れ星去り行く時を宇宙（そら）も賞でるか

何あれど迷うに焦り悔いのないこれぞ我なら自慢となるや

和歌山とよくぞ言ひたり山に山山また山を越える熊野路

醤油タレありてかば焼き美味なるや三河和歌山納得の味

味噌は赤雑煮はすまし角餅とウナギにアサリこれ自慢なり

地震雲なりやと見上ぐ円環の開（あ）きたその雲鱗雲だと

久しぶりプレゼン英語思い出すマイク持つ手に汗にじみ出る

危機去るかやつと落ち着き取り戻すやはり良識残るかの国

火の用心

東京 矢崎直人

空広く歩ける町の猫鳴けばうつすら白く昼の月浮く

この一年大きく変わる環境も美しき秋早も去り逝く

空広く今年を締めることなどを散歩の道で考えてみる

外出れば部屋いと温き教わりぬ今年一番冷え込んだ日に

火の用心聞こえ始める町の声消点検夢にまで見る

新しき手帳に予定書く度に来年こそは来年こそは

国宝をスマホで観られ嬉しくもいつか本物この目で観たし

何歳で戦争の時生きたかで人それぞれの三島忌思ふ

楽しめる気持ちと余裕頑張つて続けていける小さな理由

こんなにも綺麗月を見つけたと教えてあげて伝えられたら

冬気配

東京 森岡陽子

冬気配 枯山水の名庭の祝いの席は春風の吹く

山の木々赤や黄色に秋残し冬の初めの空気の景色

冬夕焼富士の姿を写し出す簀の周りの小波輝く

あと一歩近づきたくもコロナ禍で「久しぶりね」と小声で挨拶

車窓より遙かな紅葉指をおり俳句短歌の言葉をさがす

一歩ふみもう一歩ふみ枯葉道心地良き音歌曲かな

号だけの名前なしまま育てられバラ園の中で大事に囲まる

一風は山茶花の花散らせ隣の椿のつばみに至る

風柔し櫓に生まれし段々に同じ形の大根干さるる

「君が代」

豊川 白井 信昭

一人づつ健康確認と検温と手指の消毒済ませバスに乗る

朝倉山三重塔見ゆ真禪院しんぜんいん駐車場より参道あがる

本堂の静もれるなか我と妻間隔を開け一行につきゆく

境内の庭巡るなか千両の小さき円実色つぶらみづきたる黄

石垣にヒラドツツジの返り咲き二花三花寒くはないか

本尊の行基菩薩に願わくは安寧を乱すコロナの収束

「君が代」の発祥地とここ奉納の角礫石かくれき灰岩ひとつ塊かたまり

基壇の上久方ぶりに出合いたりかのさざれ石甍りくる

美濃路なる五か所全てを巡り終え濃尾平野の帰りゆく道

匠真はチャイルドシートにいつしか寝ねつつ目覚め今し着きたり

大銀杏枝四方八方に天を向き黄葉もみぢだす黄葉もみぢ今年は遅し

芋納豆

蒲郡 杉浦恵美子

我が下る坂より上に海見ゆる篠島日間賀島影近く

今ははや干支が三つも巡りけりこの街夫と暮らしし頃から

抜け道と思いきやはて行き止まり知ってるはずは昔の話

浦島太郎方丈記など思ひ出づ三十年の変貌茫茫

須賀敦子勧むる人あり我も好きされど行間哀しみ深し

芋納豆誰にあげようひとつずつかたち選んで小箱に詰めて

緑茶かなはたまた紅茶珈琲かこんな迷ひが一寸嬉しい

我が宿を訪ねし人あり侘び住まる短き午後の小春の日和

マスクして挨拶すれば不審な眼ほらお仲間のわたしですのに

コロナ禍に気付きしことがひとつあり人こそ大切ものはいらない

宇宙船

横浜 阿部 淑子

すばらしき地球とふ星に生を受け自然と人に守らるる今

アララギの輝き溢れる新春号豊かな叡智学べる悦び

毎春におしげなく摘みて送らるるお正月花の香りめでたし

打ち上げし米民間船は成功し三度目の宇宙英雄野口さん

野口さん二十七時間の宇宙船クルードラゴンに戻れて感無量と

庭の柿洪が抜けたと妹の送りくれし葉付の柚子を添え

重ね着てなお寒がりし我が夫も電気ジャケットにぬくぬく笑顔

念願のスタンド設置娘よりLEDライトで老眼に光明

米袋

豊川 山口千恵子

運びきて倉庫に米袋つみ上げる今年とれたる新米の袋

石路は株をひろげて花の咲く槇の根元に黄色あざやか

ホトトギス今年も花を咲かせたり紫まだらの花のさびしげ

乾きたる音して枯葉舞ひゆけり今日は朝より西風強し

さつまいも土の中より掘りい出すしめり気おびて紅色あざやか

秋葉様の常夜燈に明りともす当番知らせる札廻りくれば

太りたるカマキリ一つ動かざり玄関脇の日だまりの中

満月が倉庫の上に出てをりぬその輝きをしばし見て立つ

高く低く黄の蝶二つとびてをりいつしか見えなくなりてしまひぬ

堀ごしにダチュラの花の白き花小春日和に静かに咲けり

去りて来たりて

豊川 夏目勝弘

払ひ出すのみの我が貯金通帳ただそれのみで生きてゐるなり
コンビニへの行き帰への三十分が今日の一日の運動量なり
今日読みし本の内容たちまちに消え去りてをり何が残るや
ガス代の集金人の来たりけり今日会ひし人はその一人のみ
夏の去り秋もまた去りあゝ冬が冬の寒さのあまり気にせず
去りては来るこの平凡が人生か還りて行く先何処なるべし
雨となり川となりて海となる自然もまたこのくり返し

雑草の茂り花咲き種を落す彼岸花は種を作らず

我が家は我にて耐える定めなりや還り行く先たしかに有るが
来り去る去りて来るが永遠に命あるものの定めなりけり

何処より我は来しや思ひ出せず還り行く先は来し所なりしや

『いっよよせ』

西浦公民館 いーはとぶ

誕生を祝う家族の真ん中に小さくなりしわが母の笑顔

水野 絹子

宵待の皓々とせまるに來るはずもなき人にさえ会へる氣のして

何事もゆつくりやれぬわれなれどなか急かれる心地してくる

牧原 規惠

先の事思ひ悩みて落ち込むごといやなるやうになるまた思ひつつ

言ひ過ぎしに己のことばに傷つきてふと見上げたる秋空の青よ

稲 吉 友 江

雨上がり金木犀の散り花の金色踏みしめ太極拳にゆく

文学館の南の屋根に烏らしいつまでもゐる群れなしてゐる

鈴木美耶子

賢治のことテレビに見てより寝ねむとす早も中天に中秋の名月

整然と暮らしゆくかなコロナ禍時今宵きき入る集く虫の音

吉 見 幸 子

氏神にお参りにゆく道辺に赤きに怪し彼岸花見ゆ

亡き母の嫁入り座布団すてられぬ幾度目なるや冬カバーする
生垣の椿なん本剪るのやら毛虫発生 of 最終対処よ

牧原 正枝

バイオリンとピアノの合奏を聴く今宵浅間温泉「車坐の間」に
先生のお庭のノボタンの赤むらさきを見ながら通る今朝の私

森 厚子

土の香のする歌集読みつつ目を上ぐれば車窓に見ゆる黄金の稲叢
休校に一人カラオケしたいと言ひ風呂場からはや歌声聞こゆ

山崎 俊子

台風は沖を往くらしこんな夜は茄子の琥珀煮ゆるゆる炊かむ
竹島の橋より眺む吾が町よ西浦半島のみどりまみどり

三田 美奈子

現代学生百人一首

東洋大学

空高く丸く大きな梨たちを手に狩る重さ夏の思い出

双葉外語学校二年（千葉県）

LEITHA

松の下待っているのはおばあさん喜ぶ私涙零した

国書日本語学校二年（東京都）

王有成

軒下で雨宿りして君といふこの瞬間止まっていたほしい

国書日本語学校二年（東京都）

岳美汐

雨上がりアジサイが咲く花びらで落ちた雫が夏歌である

国書日本語学校二年（東京都）

曹偉

バイト行く今日は先輩いるのかなシフト表見て笑みがこぼれる

帯広北高等学校二年（北海道）

留学のポスターの前で立ち止まる夢ある友とまだない私

北海道千歳高等学校一年（北海道）

三浦奏愛

しわくちやの手を握って行つた墓参り今年は握らず会いに行く夏

秋田県秋田北高等学校一年（秋田県）

塩田遥子

あーそれな！うすつぺらいとは思いつつ今日も駆使してみんなに合わせる

山形県立酒田光陵高等学校一年（山形県）

石垣茉莉生

贈呈誌

森岡陽子

秋楡 第109号

○ひっそりと首すじよぎる風淨し花立ての水かえいる朝^{あした}

三原香代

○千曲川渡れぬなれど思い出に心うるおう秋の来ており

市川壬子

○うち深く刺さりし記憶の疼きいる夜のひそかに流れゆきたり

木村郁子

○夜闇の府にクローバー葉をとじ眠りいる夜は短い風しずかなれ

杉山千里

冬雷 12月号

○蟻たちが畑の土に穴をあけさらさらしたる砂を持ち上ぐ

兼目久

○並び立つ木下に分かれ散り敷ける金と銀との木犀の花

森藤ふみ

○刈り終へし稲田に鳩が五、六十来て餌を拾ひパツと飛び立つ

小川 照子

○鈴の音の聞えてきさうな今日の空ひととき幼にかへる吾なり

富田眞紀恵

○燃えさかる松さながらに狐花吹き来る風にいよよ燃えをり

山口 嵩

○勢ひの陰る畑の草草よ陽のやはらぎて秋の気配す

中村 晴美

○青紅葉ひるがへりひるがへり枝伸ばし初秋の風をわが目に見する

赤羽 佳年

○あの時の津波はここまでと手を伸ばしドアの上部の変色部を指す

飯嶋 久子

○刻をきめ訪いくる守宮に手を打ちて迎えてやりぬ厨の窓辺

児玉 孝子

○山梔子の葉を食べつくす揚羽の幼虫大きくなる日を野鳥は見てる

永光 徳子

○秋深く風にゆらゆら身をまかす蜘蛛は巣を松の間に掛けて

佐々木せい子

桃太郎さん音頭

高橋育郎 作詞

正義の味方だ 桃太郎さん
気はやさしくて 力持ち
昔むかしの そのまたむかし
桃から生まれた 元気な子
いつでも いつでも みんなのアイドルだ

命のみなもと 太陽を
シンボルマークの 桃太郎さん
日本一の旗 ひらひらと
いぬ さる きじと手を結び
そりや進め そりや進め 勇んで鬼退治

腰につけてる お弁当は

健康一番 黍団子

桃太郎チームは 栄養満点

力もあり たくましい

逃げてゆく 追いかける 鬼どもこらしめろ

逃げた鬼ども どこへやら

闇から闇へと はびこって

この世の中に ひそんでいては

人間様を 苦しめる

呼んでみよう 呼んでみよう みんなの桃太郎さん

呼べばこたえる とんでくる

頼りにしてます 桃太郎さん

みんなの憧れ スーパーヒーロー

時代を超えて これからも

すこやかな未来を 守ってくださいな

『俳句』

古民家の垣は山茶花くぐり門

松本周二

爪を切る音一つつ冬めきぬ

年惜しむ第九を復習ふバイオリン

柊の花に寡黙といふ香り

山元正規

園児らに追ひ払はれし寒さかな

反骨は豪も変らず木の葉髪

万葉の歌碑にかくるる石路の花

森岡陽子

せまり来る富士の姿や冬夕焼

深大寺石段ごとの散紅葉

暮れ残る海面を染むる冬夕焼

田 中 清 秀

青空に富士差す指の冷たさよ

オルガンの響く教会冬すみれ

口重き父の仕立てし厚物咲

浜 田 紀 政

神木の黄葉拾ひて朝参り

豊漁の船に群れ来る冬鷗

月冴ゆる信濃の里の黒き影

重 野 善 恵

山茶花の愛し盛りの四五分咲き

紅葉狩きれいきれいと姉卒寿

石垣に影のびてゐし冬麗

植村公女

事故あとの花束乾き冬に入る

世界地図天地返して冬の雨

萩刈りや陽の射す庭も風侘し

木村歩歩

琴平に菜々実七つの七五三

木枯や燕の巢落つ店仕舞

風もなく散りゆく紅葉またひと葉

米代川の支流の支流栗落ちる

今泉如雲

だみ声の村長候補刈田道

旅鞆出すこともなく秋暮るる

小鳥来て始まっている今日の音

岩崎あつ子

今見えし人もう見えず芒原

一筋の道空に抜け芒原

古文書を照らして秋の日なりけり

侘助やまずひと花の咲き初むる

今泉由利

冬の海熱水噴出口やチューブワーム

小柱のしゃぶしゃぶしてゐる冬籠り

鰭れ酒は口実にして会ひにゆく

オリオン座ペテルギウスよ憂ひをり

質量のハラリと見ゆる落葉かな

かさね吟行会

「袖ヶ浦公園」

11月

田中清秀

袖ヶ浦への吟行がやっと実現できた、コロナ禍の影響や天候不順でなかなか行けずにいた念願の「旅」である。令和二年十一月十三日、吟行には絶好のうらかな小春日和に恵まれた。川崎駅から高速バスに乗り、東京湾アクアラインで海はたるを經由して袖ヶ浦バスターミナルまで向かう。このアクアラインは川崎市から千葉県側の本更津市までほぼ一直線に結ぶ高速道路で、一九九七年に開通した。川崎から東京湾アクアトンネルを抜けると中間地点に「海はたる」と呼ばれる人工島があり売店やレストラン、展望デッキなどがある。その先はアクアブリッジという日本一長い橋梁が続く。バスから眺める東京湾は素晴らしい景色だった。海は銀色に輝き、真つ青な空、行き交う漁船やタンカー、東京湾のど真ん中ならではの絶景が広がる。

袖ヶ浦バスターミナルまでは約一時間で到着、その後は、地元の松本さんの案内で袖ヶ浦公園周辺への散策となる。袖ヶ浦公園は袖ヶ浦市郊外にある水と豊かな自然

景観に恵まれた市民憩いの場所である。公園入口までの散歩道には広々と田園風景が続き、大根やキャベツなどを栽培する畑が懐かしふるさとの景色を残している。

冬の朝光集めて浜（ひび）の海

陽子

冬あざみ荒野に色を残しをり

周二

公園内には上池（かみいけ）と呼ばれる大きな池、岩と清流が美しいせせらぎ広場、子供達に人気のアドベンチャーパークなどがある。当日も近郷から多く幼児たちが遊びに来て賑やかだった。また、旧進藤家という江戸時代末期に代官をつとめた古民家が展示されている。これは上層農家の生活洋式を現代に伝える貴重な建物で、綺麗に保存管理されていた。厨の竈には火が入れられており、これは燻すけむりが建物の虫除けの効果があるらしい。

郷土博物館では、現代からさかのぼって約二万年にも及ぶ袖ヶ浦の歴史を紹介している。また、博物館の入口付近には見学者を迎えるように裸婦像も置かれていた。裏の広場には竪穴式住居が立派に再現され、さらに隣接した万葉の里には和歌の歌碑が並び、全体に情緒ある日本の原風景の雰囲気を訪れる人の心を癒やしてくれ

る、のんびりと小六月の散策を続けていく。

ひと群れの寒菊向きを日に揃へ
裸婦像に乾く風吹く小春かな

素山
清秀

ここでは例年春に、花菖蒲まつりが催される。五十種一千五百株の花菖蒲が見事に咲き、その中にかすり姿の花摘み娘が意趣をこらして美しい景色にさらに華を添えると言う。菜の花の黄色、桜の淡いピンク色、花菖蒲や紫陽花の紫などさまざまな彩りは早春への旅情を今から掻き立てられる。

初冬の今は、大きな池のあちこちに鴨が群れ遊んでいた。池端で羽繕いをしながらくつろぐもの、優雅に鴨の陣を作り のんびり浮かぶもの、通年見られるカルガモのほかマガモ、コガモなどの渡り鴨の姿も見うけられた。

風除けて日溜りに寄る鴨の陣
水鳥の声ほど姿現さず

さち子
正規

散策後、タクシーの待ち合わせで寄った道の駅「ゆりの里」では野菜や果物、タマゴなど地産地消の新鮮な品々が売られていた、特に長くて太い大根、ゴボウ、ネギな

ど取りたて野菜が目を引く、こんなところにも袖ヶ浦の魅力が隠されているのだろう。

昼食は道の駅から程ない木更津市内の寿司屋「魚喜」でのさしみ定食、さすがに海に近い木更津ならではの魚の味は格別、追加の穴子の天ぷらも美味しかった。その場を借りて句会を行い、いつものように囑目三句出し四句選で無事終了した。

最後にお世話になった松本さんに改めて感謝申し上げます。



アクアラインと浜の景色

『酔いの徒然』（二〇五）

丸山 酔宵子

『京都気儘にぶらり10万歩』

「Go to Travel」で東京も解禁となった10月初旬、京都は外人観光客は皆無、一般観光客も平日には疎（まば）らで、本来の京都が戻ってきたようだ。

京都には学生時代から四季を通して数十回と来ていて、大半の有名寺院は一通り行ったつもりだが、今まで行ったことのない名跡を中心に、夜は夜で先斗町を中心に美味しい居酒屋巡りの気儘な只管（ひたすら）ぶらりぶらりの7日間。

初日の高台寺、ねねの道、八坂神社に始まり、桂離宮、西芳寺、鈴虫寺、相国寺、清明神社、大徳寺、二条城、伏見酒蔵巡り、寺田屋、伏見十石舟川下り、三千院、寂光院、高山寺、神護寺、下賀茂神社、大河内山荘そして最終日の平安神宮、永観堂禅林寺で「みかえり阿弥陀如来」に感激し、哲学の道を歩いて帰途に就いたのである。

あいにくの秋の長雨模様の毎日であったが、宿泊先は先斗町にも近く交通アクセスが素晴らしいホテルオークラで、基本的にはホテルからバスや地下鉄をフルに活用し、1日当たり15,000歩、7日間で10万歩以上。

桂離宮には一度は行つてみたいと思っていたが、宮内庁での半年前からの予約が必要で今回はあきらめていた。しかし西芳寺（苔寺）は一か月前に往復葉書で午後一時の予約を取っており、折角ならば、西京区内で近くにある桂離宮を外からでも見てみたいと、肌寒い本降りの雨の午前前十時過ぎに一般道から離宮敷地内に入る。砂利道が広がり素晴らしい「竹の穂垣」が小川の先の入り口へと続いている。

既に、事前予約をしつかり取つてあるであろう数人の人たちが入り口付近で並んでいる。と、驚くなかれ、これは奇跡か。特設テントが設置されていて、当日予約で午前11時からの見学を受け付けていたのである。

一組8人、宮内庁職員の丁寧な案内でゆつくりと一時間のツアー。桂離宮の簡素な美を絶賛したドイツの建築家ブルーノ・タウトをして「泣きたくなるほど美しい！」

と言わしめた回遊式の庭園が、今、将に秋雨にしつとりと濡れて眼前に広がっている。

その後、午後一時に予約していた西芳寺へ。きっちり一時に開門され、時節柄、検温とアルコール消毒した後、先ず、写経が必須である。新型コロナウイルスの終息を祈念しての写経を奉納して、長年の憧れの西芳寺の苔庭園である。桂離宮とは違った趣で、少年のころから想像し、期待していた苔寺とは、現実はそのスケールの貧弱さや養生の仕方など残念ながら落胆せざるを得なかった。天龍寺塔頭 宝巖院や寂光院、三千院の方が遥かに趣があると思うが・・・。

声明が苔に渗みるや三千院

酔宵子

楽しい時間 98

山本紀久雄

2020年11月30日

鉄舟から影響を受けた九代目市川團十郎・・・その四

前号で述べた市川三升（十代目市川團十郎）が『演藝畫報』昭和7年（1932）11月号で、「わが家系を語る。甲州と團十郎の關係について」と題する手記の続きである。

『堀越十郎と云ふ人はお能の先生で、武田北條がほこを合わせた時、即ち信玄の所謂「三増合戦」に参加して、敵の大將の首級を挙げ信玄公から厚い御褒美をあづかった事もあるひとです』

『十郎は熱心な不動明王の信仰家だったそうです。市川家が代々不動様の信仰家であるのもここに源を発してゐるのでせう。また、下総へ移住することになったのも、成田の不動様を思い出して、その近くへ移る気になったのではないかといふやうなことも考えられて来ます。尚ほ、その当時、十郎の家が、甲州市川庄の中、上野郷（現在の「上野村」）俗にホリコシ（堀越）と云ふ所にあるから御覽なさいと云はれましたので、拝見させて頂きました』

『家の傍に、堀越家が開基したお寺「天正寺」といふのがありました。天正寺の御本尊も不動明王でありました。

これで長い間、不明だった市川家の先祖に対する調査も済みました。私は石原氏から市川家の家系譜を譲って頂いて、東京へ帰ることが出来たのです』

そして市川三升は結論としてこう断定する。

『市川の姓は、市川庄からとり「十郎」は先祖十郎の十郎を借りて、市川段十郎——團十郎と名づけたものに違いありません』

次に、『團十郎と海老蔵』（江宮隆之著 2011年出版 学研新書）が、三升の市川家系図探しについて解説しているので、この内容を整理して紹介したい。

三升が昭和7年3月、貧困者救済歌舞伎特別興行のために甲府を訪れた際、甲府財界やマスコミ界の有志が参加して「甲府三升会」という後援会がつくられた。

この「三升会」が、あらゆるアンテナを駆使して、市川家にまつわる情報を入手し、その過程で、初代團十郎の先祖について記された「堀越系図」が発見され、それが三升の手に入った。

中心になって三升会をリードし、市川家のルーツ探しに大きく貢献したのが、山梨県の地方紙・山梨日日新聞の社長だった野口二郎だった。野口は文化面にも優れた目を持ち、郷土史にも造詣が深い人物であった。

このような協力者たちの後援があつて、三升は代々の團十郎が果たせなかった市川家のルーツを証明する史料と資料を入手することに成功、これを山梨日日新聞、東京朝日新聞山梨版、報知新聞山梨版等が一斉に報道した。

『團十郎と海老蔵』は、「堀越系図」についても詳しく展開していることから考え、著者の江宮氏は実際に系図を手にとって見たのではないかと推察する。

以上、『團十郎と海老蔵』を参考に記述してきたが、同書の中で著者の江宮氏が、次のような疑問をあえて投げかけ、

かつ、回答している。

「市川團十郎の祖先が堀越十郎という人物であるとしても、それが本当に甲州にいて、武田信玄の家臣であったのかは分からない」と疑問を出し、その答えを述べる。

《それは一つの位牌です。高さ五十センチほどの位牌で、東八代郡御代咲村（現在の笛吹市一宮御代咲）の中山派本山広厳院というお寺にありました。この寺の住職で栗木道順という方が、寺の開山堂を修復した際にいろいろなものを整理しました。

その時「漱桂院越山道超居士」「久昌院淨月妙観大姉霊位」と戒名が書かれた位牌が見つかりました。位牌の裏面には「堀越重左衛門」とありました。しかし位牌が見つかった当時は、この位牌の主「堀越重左衛門」という人物が誰であるかは不明でした。

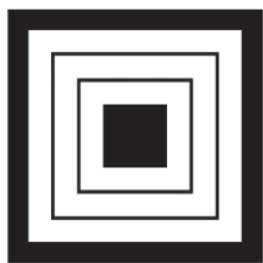
「堀越」なる人物も戒名も、広厳院には記録がなかったからでしょう。ただ、「堀越重左衛門」が下総に移住した堀越家の当主であり、戒名の「越山」「超」などの言葉は、堀越一族が甲斐の山を越えて相模、下総と落ちのびていったことを示すとすれば、意味も分かります。また、名前は位牌の裏面に書かれていることから、重左衛門が父母について供養したのではないかと、とも想像できます。

もしかしたら、男性の戒名は石原藤兵衛、女性も重左衛門娘のこととも考えられます（筆者注 石原藤兵衛は堀越家の系図を預っていた石原家嫡男、娘は初代團十郎の祖父堀越重左衛門の子で、二人は夫婦）。位牌の人物は不明のままながら、堀越一族にあることは確かでしょう。この位牌を市川三升は買い取って、堀越家の菩提寺である横浜市の総持寺に納

めました》

以上から想定できるのは、市川家と山梨県は何かと関係があるのではないかとということ。

再び、三升の『演藝畫報』手記に戻りたい。



《先ず市川家の三桝の紋の出所ですが、これは信玄公が制定した武田家独特の度量衡の三桝から出たのではないか思われるのです。信玄公の桝目は、徳川以後の三升桝を一升桝とし、その内側に徳川以後の二升桝がすっぽりはまり、そのまた内側に同じく一升の桝がすっぽりはまるやう、三つの桝が組み合わされてゐたのです。これが長い間武田氏の甲州で使われていた桝目です。そして武田氏没落後も、徳川末期まで、この特殊な桝目が甲州では使われていたのです。市川家の三桝は出生の故郷甲州の三桝から発したものと断定してい、でせう。それを堀越十郎が三桝合戦の軍功としてこの三桝を拝領したと云ふ事実もあるのですから、先祖の戦功を記念する意味もこめて、これを定紋にしたと思われるのであります。柿色の素袍も、市川流の荒事にはつきものであるが、柿は甲州の名産（甲州八珍果、江戸時代に甲斐国で生産されていた代表的なブドウ・ナシ・モモ・カキ・クリ・リンゴ・ザクロ・クルミまたはギンナンの∞種類の総称）である所から出発してゐるやうに考えられます。また、甲州は鯉を名産としてゐますが、替え紋の「荒イソ」の紋もそんな所から出たものではないでせうか》

次号に続く。

絹の話 (122)

「アトリエテレビ」 今 泉 雅 勝

仁徳天皇と玉繭と皇后

古墳時代(4世紀)の絹生産

日本への絹の伝来は弥生時代後期に揚子江方面から伝わって来たと云われますが、紀元前後、徐福伝説にあるように中国北部からより新しい技術が伝えられたと考えられています。5世紀になると主として朝鮮の百濟から大和朝廷の招聘もあって、大勢の養蚕・製糸、染織に至るまで、多くの技術者達が家族ぐるみで渡来して来て、製糸技術に著しい進歩が見られ、従来の太い紬糸から蟬の羽根や霧の様に薄くて柔らかい織物が出来る生糸が作られ、為政者の権力誇示はいうに及ばず、それまで植物由来の苧麻や大麻、葛布の様な麻が衣服の主流の時代、臣下への下賜物として大いに役立ちました。

絹の更なる増産を図る為、彼らを畿内から地方に分散させ、絹糸生産技術の地域差が顕著になってきました。同時に天蚕の様な野外に生息する野蚕の生産は不安定な収繭と製糸効率悪さから次第に舶来の家蚕に変わって行きました。

仁徳天皇と皇后(磐之姫命)

仁徳天皇は2019年世界文化遺産に登録された「百舌鳥・古市古墳群」の中の大阪堺市にある前方後円墳「大仙古墳」(仁徳天皇陵)に葬られたといわれています。

仁徳天皇は三韓(朝鮮半島南部・馬韓、弁韓、辰韓)征伐を成し遂げ、後の百濟との文物交易(仏教、鉄器等)を活発にさせた神功皇后の孫に当たる16代天皇(西暦313~399)で、「天皇が高殿に登って国々を見渡したところ、家々に煙が上がつていないのを見て、今後3年間は課や役を免除する」と言われたという事で、聖帝として有名な天皇です。

皇后(磐之姫命)は天祖降臨の地といわれる奈良の高天原の葛城一族の葛城襲津彦の娘で皇族外からの初めての皇后と云われ、仁徳天皇4皇后の一人。

玉繭

4世紀には養蚕が広く発達したとはいえ、古代中国(黄、殷)でも行われていたように、皇后自ら野に出て桑の葉を摘み、養蚕に励んでいたようです。

その指導は百濟からの帰化した奴理能実が当たっていたと記紀にはしるされています。

この時代の繭は春夏2度集繭できる家蚕で、夏の繭は

2頭の蚕が玉繭と云われる大型の丸い繭を作ることが多く、糸を揚げる時、糸が絡んで太い所が出来たり、節ができて良い糸が採れない繭です。

仁徳天皇の好色

仁徳天皇は皇位継承の時自害して皇位継承を譲ってくれた弟の「仁徳天皇の腹違いの妹を後宮に入れてほしい」という遺言を果たすため色々策を講じるのですが、皇后の知れる所となり、歌のやり取りの末、皇后から次ぎの様な絶縁歌が天皇のもとに届きました。

夏蚕の ひむしの衣

二重着て 囲み宿りは 豈良くもあらず

その蛹の衣である繭層は二頭の蚕の糸の絡み合いで作られています。

そうした二重に絡んだ恨み事のこもる繭殻で囲まれた宿は良くありません。

夏の蚕は二頭が一つの繭を作る習性が有ります。

と言って自分の故郷に向かうのですが、実家に戻るわけにもゆかず、養蚕指導を受けた百濟帰化人の奴理能美の家に逗留する事になります。

天皇は舎人を出して帰るよう促しますが、皇后は帰りません。天皇は皇后を迎えるために船で山城に出かける途中、桑の枝が水に流されて来るのを見て。

つのはふ 磐之媛が

おほろかに 聞こさぬ うら桑の木

寄るまくじき 川の隅隅

寄ろほひ行くかも うら桑の木

皇后が大事にしている桑の木があちこちぶつかって流れて行くように、私もあちこちぶつかって、あなたの後を追っております。というのですが遂に皇后は帰りませんでした。

この時代は帰化人を中心に養蚕が広く行われ、繭の出来る時期により玉繭などが出来て、それでは良い糸が繰れないなど、当時の様子をうかがい知る事が出来ます。

残念ながら古墳時代の絹織物の現物は殆ど現存しません。

当時の墳墓から発掘された夾紵棺などの一層に使われているのを見る事がありますが、多くは舶来の絹が使われている様で定かに日本製の絹かどうか判りません。

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田 勇氣

2020年12月2日

寝れば治る 睡眠を軸に

本枯らし という言葉がピッタリの北風日和です

予報では今日は午後から雨です

この時期の雨は空気を潤わせてくれる恵みの雨です

ありがたいですね

本田カイロプラクティックでの1番の健康方法といえは

23時までの入眠睡眠です

本田のひとり言を読んで下さっている皆さんは

聞き飽きましたよね

でも患者さんとお話していますと

23時までの入眠が厳しいという方が結構いらつしやいます

逆に23時までに入眠すると翌朝の身体の状態が本当に
違い楽です

と云って下さる患者さんもうらつしやいます

睡眠は長さではなくタイミングが重要です

シンプルに言えば眠い時は寝るです

例えば昼食後眠くなりますよね

食後3時間は寝ない方が確かに胃腸には負担がかかります
ません

しかし昼にそんな時間はありませんよね

そうしたら20分〜30分空けて15分位寝て下さい

無理して起きてる方が身体に脳に負担が出てしまいます

ちなみに昼寝は15時までにしましょう

それを過ぎると夜の睡眠に影響が出てしまいます

睡眠を軸に生活習慣を変えろというのも良いかもしれ
ませんね

今日も笑いながら行きましょう

2020年11月30日

マスクを使い分ける

朝方外を歩いていきますと

空が綺麗で空気が透き通りその空気が頬を引き締めます

なんとも贅沢な時間です

気温と湿度下がりますと

様々なウイルスが活発になり空気中に長く停滞します

マスクは自分から出るウイルスを他の方につつさない為

というのが本来の役割ですが

マスクを着用していると咽頭が潤い

対ウイルスにもなります

その時にガムを噛むと唾液の分泌量が増え更に効果的です

緑茶や紅茶の定期的なうがいの効果的です

この件も十年以上前から話しています

そこで

「先生はなんのマスクを使ってるんですか？」

と健康意識が高い患者さんから質問をいただきました
施術中と「ブライベート」は違うものを使い分けています

興味のある方は施術にいらした際に聞いてみて下さいね
本日も23時までに入眠しましょう

「江上浩二の独り言」 37

江 上 浩 二

寺田寅彦の子規追憶

先日、子規が眠る東京北区田端の大龍寺の前を通ると、子規の石碑に柿が供えられていた。調べると十月二十六日が柿の日だという。由縁は子規が有名な「柿食えば鐘が鳴るなり法隆寺」を詠んだ日という。

以前にもお話したかもしれないが、結婚して偶然家内の実家に住むことになり、その家内の実家が田端の大龍寺の道を挟んで斜め前にあったので、大龍寺を通して、書籍の世界の子規、漱石、寺田寅彦氏などが私の実の世界に現れることになったのである。それは住み始めた昭和五十三年三月頃からである。それまでは神奈川県で普通の中学生高校生として、夏目漱石、芥川龍之介、萩原朔太郎、太宰治、森鷗外、大学へ入ると小林英雄、江藤淳、寺田寅彦などを主に、度の強い近眼の眼鏡を通して接していた。

そして、田端が田端文士村と言われて著名な作家の方々

が人伝に人が人を慕い、明治後期から昭和初期にかけて文化を育てた地と知った。しかし、文士村でなく初期は現東京藝術大学関係のアーチストが居を構え、陶芸の板谷波山が窯を焼き、そのアーチストを慕って作家の卵、北陸から室生犀星を始め、その後日本を背負って立つ名前を示した萩原朔太郎、芥川龍之介、若き小林秀雄など多くが移り住んだ。板谷波山を慕ってその後益子焼を有名にした濱田庄司も田端に移り住み、暫しの間、時を進めた。

さて、東京帝国大学の地震学者となった寺田寅彦は漱石が熊本の第五高の英語教師の時の教え子で、上京後漱石に子規を紹介されたりして俳諧にのめり込んだ。子規の早世について2編の追憶を記しているが、一つは死後約三十年に経って次のようにまとめている。

昭和三年九月『日本及日本人』

子規の追憶 寺田寅彦 「青空文庫より」 抜粋

二

学芸の純粹な進展に対して社会的の拘束が与える

障害について不満の意を洩らすのを聞かされた事も一度や二度ではなかったように記憶する。例えば美術や音楽の方面においていわゆる官学派の民間派に対する圧迫といったようなことについて、具体的の実例をあげていわゆる官僚的元老の横暴を語るものであったが、それがただ冷静な客観的の噂話でなく、かなり興奮した主観的な憤懣ふんまんを流出させるのであった。どういう方面からそういう材料を得ていたかまたその材料がどれだけ真に近いものであったかは自分には全然分らない。しかし故人がそういう方面の内幕話に興味を有ち、またそういう材料の供給者を有っていた事はたしかである。

子規は世の中をうまく渡って行く芸術家や学者に対する反感を抱くと同時に、また自分に親しい芸術家や学者が世の中をうまく渡る事が出来なくて不遇に苦しんでいるのを歯痒はがゆく思っていたかのように私には感ぜられる。

最近それを読む機会があり、行を追っていくと、世間で騒いでいる日本学術会議の会員任命をあたかも批判し

ているような勢いだったのだ。

確かに任命権者は総理大臣だが、仕組みはよく知らないが、私も若い頃大学院生と引き続き民間企業の研究員をしていた頃、末端の組織でその会議の何かの委員を選出する有権者だった。普段は行政のプロセスで推薦者と任命者の調整がされ、わざわざ総理大臣が最終判断をすることなく、これで宜しいと押印するだけの事と思っていたが、実は令和二年十月に新総理大臣がある特定の候補者を除いて任命とした自ら口表したのが事の発端である。

寅彦が、子規の死後三十年も経って彼の追憶を彼の弁をして、かなり強く書き記した理由も定かでないが、自分の代弁とさせて、昭和初期三年（病死する六年前）ごろに、似たような騒動がアカデミック界であったのかも知れない。

追記、いつも年末になると寅彦を振り返ってしまう。寅彦は昭和九年の十二月に病死している。

居は田端の西方隣、旧名駒込曙町（現在でも町会名で残っている）であった。最近、其方へは散歩をしているが暖かい日を見つけて大龍寺から行ってみよう。

漢詩研修（五十二）

千代田岳精会 平井茂行

花はなにたい対たいしてきゆう旧きゆうをおも懐おもう

釈しやく

義ぎ

堂どう

紛ふん紛ふんたるせい世せい事じ乱みだれあは麻あはのごと如ごとし

旧きゆう恨こん新しん愁しゆう只ただ自みづからなけ嗟なけく

春しゅん夢む醒さめきた来きたてひと人ひと見みええず

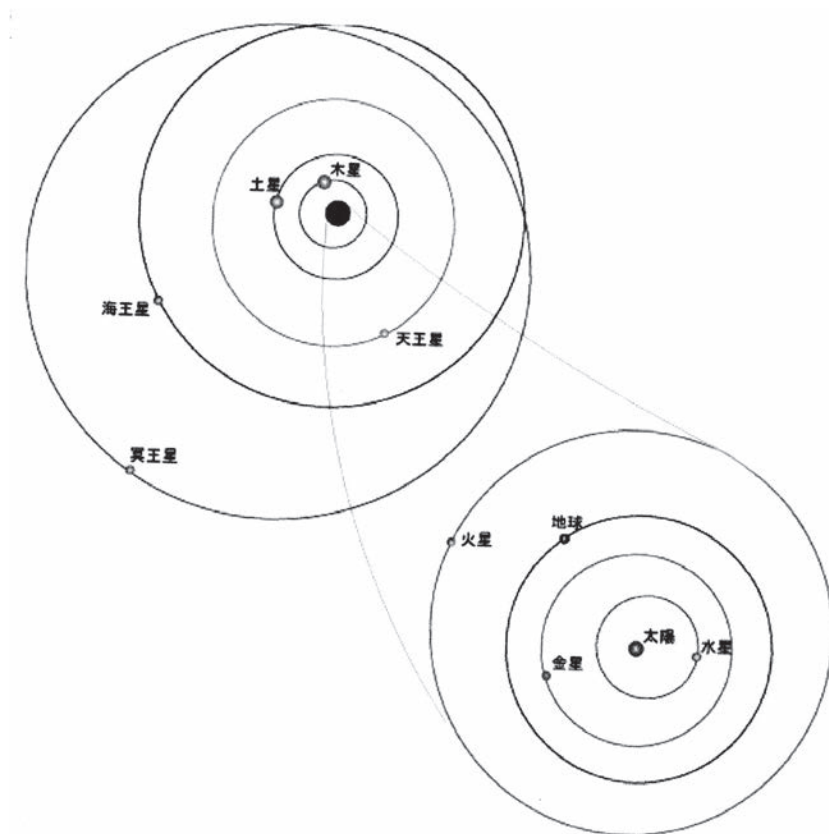
暮ぼ檐えん雨あめはそぞ洒そぞぐし紫し荊けいのはな花はな

【作者】 釈義堂（一三二五～一三八八）南北朝時代の高僧。姓は平氏、名は周信。空華道人と号し、義堂はその字。土佐（高知県）高岡郡の人。

正中二年（一三二五）正月に生まれた。十四歳で剃髪、比叡山に登って受戒道円阿闍梨に蜜法を学び、十七歳で京に上り、夢窓国師につく。国師の死後建仁寺の竜山徳見を師とした。延文四年（一三五九）鎌倉管領足利基氏に招かれ円覚寺にとどまり、応安四年（一三七二）上杉氏の鎌倉に創建した報恩寺の第一世となる。康暦元年（一三七九）足利義満に乞われて京都建仁寺に住み至徳三年（一三八六）南禅寺に移ったが、同年夏、義満が朝廷に奏して南禅寺を五山の上に置くと、その秋、慈氏院に退休。嘉慶二年（一三八八）の春、病にかかり、摂津の温泉に浴した時、後光厳天皇から安否を問われ、その天恩を謝した。同年四月三日初更、衆に生死の始末を説き、翌四日死去した。詩文に長じ、絶海とともに五山文学の双壁とされる。

【解説】 春の夕ぐれに夢からさめて、軒ばの雨がそそぐ紫荆の花を見ながら今はなき旧友たちの悲しい思い出にふけっている作。「紫荆花」の故事を用い南北両朝の合一のまだ成らないのを嘆く意を寄せている。

太陽系



中
屋
保
之

太陽系惑星軌道

太陽系とは太陽とその周りを回っている惑星や彗星、衛星などの天体をいいます。太陽の大きさは地球の約1000倍で、ガスが集まっている天体です。惑星は太陽に近い星から順に水星、金星、地球、火星、木星、土星、天王星、海王星、冥王星の順に軌道を描いていきます。

星はガスが引力に引かれて回転しながら集まって誕生します。ガスとその他チリなどの物がお互いにぶるかりあう時に、力の強いほうが弱いものを押し流し、最終的に一定の方向に回る軌道が形づくられます。このようにして、誕生した星たちは互いにぶつからず、安定した太陽系を形成しているのです。

太陽は燃えているか？

太陽は水素からできていて、酸素が存在しないので燃えることは出来ません。太陽が燃えているように見えるのは、核融合反応を起こしているからです。

太陽のように熱と圧力が非常に高い状態で水素同士がぶつかりあうと、化学反応を起こしてヘリウムに変化します。水素がヘリウムに変わる時に熱が発生し、その反応で光って熱を放出しているのが太陽です。この反応を核融合と呼んでいます。

懷古園に遊ぶかいこえんあそぶ

横山精真

山は雪裏に観るやま　せつり　み　古城の頭こじょう　ほとり

一水竜鱗としていつすいりゅうりん　千曲は流るちくま　なが

客子眺望してかくし　ちようぼう　宜しく酒を酌むべしよろ　さけ　く

絶唱を閑吟すればぜつしょう　かんぎん　旅情悠かなりりょじょう　はる

遊懷古園

觀山雪裏古城頭　一水竜鱗千曲流
客子眺望宜酌酒　閑吟絶唱旅情悠

〔語釈〕 ○山・浅間山。○雪裏・雪の中。○古城・小諸城址、懷古園。

○竜鱗・波のきらめく様。○客子・旅人。○絶唱・島崎藤村の「千曲川旅情」

○閑吟・静かにゆったりと詩を口ずさむ。

〔通釈〕 懷古園に来て見れば浅間山は雪景色の中に見える。その雪景色の中に千曲川が波をきらめかせて流れている、旅人は心ゆくまで景色を眺めたら、酒でも飲むがよからう。藤村の「千曲川旅情」を口ずさんで旅情は果てない。

〔解説〕 平成二十三年の年明けに我が岳精会本部事業部の慰労吟行会にお付き合いした。

長野県内を観光バスで移動の一泊小旅行であった。行く先は皆様任せでお付き合いした。

二日目、やがて懷古園に着いた。小諸城址である。初めてであったが、吟のお陰で色んな所に旅が出来る。何かしら良いものだなと、バスに揺られた。

懷古園に入り、観光を楽しんでいるうち、今しがた道路脇に見え隠れしていたのが千曲川であったと知らされた。そうなるも田舎びた川の流れが一層旅情を帯びて思われたのである。

早速、藤村の「千曲川旅情」を口ずさんだ。満足感を胸に最後の昼食をとることになる。懷古園のすぐ側にあるお蕎麦屋さんだ。

中に入ると早速お酒を注文した。それが黒色の可愛らしい徳利であった。酒が美味そうに思え、チョットからかって、「女将さん、この徳利持つて帰りたいね!」と言ったら、「そうですか」と愛想良い顔で新聞紙に丁寧に包んでお土産にどうぞと渡された。愉快的旅になった。帰宅して酒をチョッピリ舐めながら良い気分で作してみたくなったのである。

旅

今泉由利

行路こうろ 知らずして 郷関きょうかんを隔へだつ

千里せんりの羈心きしん 天地てんちの間ま

絶境ぜつきよう 迂途うと 探勝たんしょうの旅たび

归来きらい 枕席ねや 是仙これせん寰かん

不知行路隔郷関

千里羈心天地間

絶境迂途探勝旅

归来枕席是仙寰

(語釈)

郷関―国境

羈心―旅ごころ

迂途―まわり道

仙寰―別世界

絶境―地の果て

(詩意)

何知らぬまま、日本国から地球果てるかと、思うほど
遠く遠く、出掛けて行つた。沢山のことを見、感じ、
この地球の住人であることを心した。まわり道をし
帰り着いた自の場所、ここもまた格別と、知るのだった。

芭蕉と子規4

夏目勝弘

芭蕉は子規とは状況が違う（草の戸も住替るぞひなの家）と芭蕉庵を人手にゆずり、三寸の川に向つての旅である。

元禄二年三月二十七日（陽暦五月十六日） 九里を歩き柏壁へそして松島に着いたのは五月九日その間十二句を作る。

「おくのほそ道」への旅は、松島の朧月を見るのが最大の目的であつたが、眼前の松島の佳景に魂を奪われ「およそ洞庭西湖に恥じず」といい、松島では一句も詠まなかつた。

子規の場合は「日本」への掲載のためもあり、状況に合わせたとも思う。芭蕉は松島的美景を讃え、雄島ヶ磯にある雲居禪師をたずね、瑞巖寺に参拝松島に泊る。

翌日平泉に向うも、道をまちがえ石巻の港に、泊まるころもなく、貧家に泊す。

石巻をでて登米に泊り、十里を歩き平泉。一関に着き、高館、衣川、光堂を巡遊す。

堂宇四十、僧舎五百といわれた平泉。

○五月雨の降り残してや光堂 芭蕉
減び去った藤原三代の栄華の跡を、哀れみ一句を詠み、高館では

○夏草や兵どもの夢のあと 芭蕉
同行の、曾良は、（卯の花に兼房見ゆる白毛かな）を残し、芭蕉は一関に戻り岩手に向かう。

堺田では関所の役人の詰める番小屋を宿所としたため、枕元で馬が尿をする。

○蚤虱の尿する枕もと 芭蕉
旅寝のわびしさを詠んだ。

翌朝は大雨のため逗留。次の日險阻で知られる、山刀伐峠を越えて、尾花沢へ。

旧知の、紅花大尽の鈴木清風宅に滞在中に土地の俳人たちと歌仙を巻く。発句として、

○涼しさをわが宿にしてねまる也 芭蕉

滞在中の吟として

○這出よ飼屋の下の蟻の声 芭蕉
尾花沢で十日間をすごして、南八四里の処にある立石寺で詣でる。そして詠んだ句が

○閑かさや岩にしみ入る蟬の声 芭蕉
子規は小舟にて塩釜より松島の真中へ

○涼しさの猶有り難き昔かな
これよりは松島の句のみを

○涼しさのこころを扇のかなめかな 子規
○なき人を相手に語る涼みかな 子規

○政宗の眼もあらん土用干 子規
○すずしさや島から島へ橋つたひ 子規

○夕立の虹こしらへよ千松島 子規
○灯ちら／＼人影涼し五大堂 子規

○松島の闇を見て居るすずみかな 子規
○ともし火の島かくれ行く涼み船 子規

○すずしさのほのめく闇や千松原 子規
○すずしさを裸にしたり坐禅堂 子規

十八里の海面八百八の島々は眼のくらむ許りならんに、続き三句があり

○涼しさのこころも眼にあまりけり 子規
○松島に扇かざしてながめけり 子規

○海は扇松島は其の絵なりけり 子規
○涼しさや島かたふきて松つ 子規

○涼しさや海人が言葉も藻汐草 子規
芭蕉の「おくのほそ道」の目的であつた、松島の朧月を見るを子規もはたせず。

雄島、多賀城趾を見て岩切から仙台に帰る。五日ほど仙台で政宗の廟等を詣り、広瀬川を廻り作並温泉への道を行く。

芭蕉は最上川へ向う途中で道をまちがえて石巻へ出てしまい、登米で泊り平泉へそして山寺へと、閑かさや岩にしみ入る蟬の声と詠む。初案は（山寺や石にしみつく）とか

子規は山寺に向はず、大石田に向う。

「氷魚」のことから (240)

岡本八千代

青い渦巻の蚊取線香を昼間から燻らせて、「氷魚」を書くとするに、240回になることにわれながら驚きつつ…。

今は、コロナ禍のために古い人は外出禁止となっている私。——せめて時々庭に佇つ。枝について、今は杖がなければ歩けない、佇ずんでもいられなくなりました私。それでも「三河アララギ」を載せていただく嬉しさ、感謝の他はない。

どうしてか、今年はダチュラの白花が咲きつづく。

「陀兜囉」よ。わが「陀兜囉」よ。

しろじろと南のガラスの窓にまで

ふれつつ咲くよわたしのダチュラよ

などと浮かんでくるのであった私。

さて、茂吉のこと書かねばならない…。結婚式は無事にすんだ茂吉と輝子は二人のアンバランスがしだいに表面化してきて、いろいろな行動や、歌や文章にも、形を変えてその不満が出てきたのであった。

式後、まだ三月しか経っていない七月に、九州大学病院に入院中の長塚節に手紙を送った。その中に、「これでも小生の頭のとっぺん益々はげ、ひげに白いのが四本出来ました。今も思ひます。この世で一人のたふとい女人が小生とつれそふたならば、小生は何も彼も黙ります。」などという一節もあつた。

親友であつた中村憲吉は、茂吉より七歳年下だったが、二

人は明治四十二年秋、伊藤左千夫宅で相識つた仲であつたが、その憲吉も結婚し、牛込区南山伏町に家をもち、間もなく同区横寺町へ移った。この二人は仲良しでこの頃二人は酒好きで、よく飲んだらしい。そのうち、紀一、勝子夫妻は夜おそくまで、茂吉の帰りを見張っていたらしい。

茂吉は、大正四年頃、憲吉はじめ、赤彦、千樫、百穂、茂吉の同人五人がよく集まり、酒をのんだらしい。その時々

の歌がある。

○山峡にかへればひとり暇あり五人の姿見つゝ忍ばな憲吉
○肝むかふ五人の姿紙のうへにかきとどめたり嬉しといはむ (茂吉)

など歌を交わして楽しかったという。

また、ある時、憲吉、茂吉、輝子の三人が帝展を見に行つた時のこと。輝子(茂吉の妻)は紫の矢ガスリにハカマをはいていた(まだ学生時か?)。時々、茂吉と輝子が立ち止つてヒソヒソ話を交えていたので、憲吉がそばによつてきき耳をたててみると、茂吉が「その着物は派手すぎる」と輝子に叱言を云つていたのであつた。それが大正四年のこと。

その翌年、大正五年、春分の日のあけがた、斎藤茂太さんが生まれたのであつた。

茂太さんを生んだあと、輝子は黄疸病になつたほどであつた。しかし、輝子は茂太さんにオッパイをくれたのであつたという。

しかし、その飲ませ方も「いきなりバツサリと切つてしまふところが母らしい」と言っている茂太さんであつた。面白い輝子さん。

編集室だより【二〇二〇年十一月】

今泉 由利

○なんとなく「きれいにしたいな」と思っているけれども、なかなか実行に移せない。シルバーセンターに電話して、換気扇の掃除をお願いした。高い所に対応する人、受けて、洗浄をする人、上手に分担されて、たちまちピカピカ。もつとはやくお願いすれば良かった。今度は、家中のガラスをお願いしよう。

○家の中に閉じ籠ると、飲むことも、食べることも忘れてしまっていることが多い。それでお茶を飲まないといけない。と決めた。お茶の原産地や歴史が気になった。中国大陸の雲南省、四川省が原産地のこと、喫茶の風習は、紀元前の前漢時代。日本には、奈良時代に伝ってきた。唐からの高僧、官僚、仏教と共に。

お茶には、カフェインが含まれていて、薬草貢物として、仏教を修める留学僧などの万能薬あこがれの存在だった。鎌倉時代になり、南宋から帰国した栄西と明恵と、京都梅尾に植えたお茶が、宇治茶とつながった。

九州、博多から京都へ、鎌倉へ。禅宗の布教とともに「喫茶養生記」と広まった。

ビタミン、ミネラル、カフェイン、カテキン、テアニン。抗酸化作用があり、抗癌、抗アレルギー、腸内フローラ改善、脳の神経細胞の活性を高め、運動機能、記憶力低下にも効果ありと。

こんなにありがたい存在が身近にありました。こんなこと思いながらいただくお茶に、ホッとしてみよう。

○百忍の詩 中江藤樹作

・七情とは、喜・怒・哀・楽・愛・悪・欲、とぞ。自分の心に、一つ一つの漢字をあてはめて感じてみた。大丈夫、皆持ち合わせている。もつと、一字一字、しつかり感じて生きていよう、と思いついた。

・五福①寿命の長いこと。②財力の豊かなこと。③無病なこと。④徳をつむこと。⑤天命をもつて終わること。

このようにありたい…とは、いつも思っている。

・百忍①百度も忍ぶことが出来る。

・真境②まことの境地。真境、この漢字を使える人になりたい。

○どれだけ家に閉じ籠っている、少しも退屈しない。上辺だけの見聞だった事々に、どんどん近付いてゆける時間が、いっぱいあるのだから。

シルクロードの、ほんの入口までしか行ったことがなかったのに、それから先の真実を、克明に知る記録を探し出せる世の中になっている。仏教が通ってきた道の洞窟の仏像達。砂漠の土に踏ん張るような気持になって、おひとりおひとりに、ご挨拶出来る。

○古代アンデス文明の地域は、かなり近付いたことがあったから、家に居ながら、もう一度逢いに行つたような親しみ。今まで生きてきた集大成をしている。不思議なほど心満ちている。

○私の幼かった時から、神経痛で隠居所にいらしたおばあ様の、役に立つ、という役目があった。食堂まで出て来られないおばあ様に、毎食事をお盆にのせて届ける「息がかかってはいけない」と教えられて、お盆を目の上に捧げて、しずしず廊下を運んだことを思い出した。今考ええると、このスタイルは、コロナ禍の他人への心遣いと同じだ。

野菜・果物・まんだら (35) 慈姑・くわい

学名 *Sagittaria trifolia* L. *Caerulea*



○オモダカ科の水生多年草、オモダカの栽培品種。
別名 田草、燕尾草、クワエともいう。

○日本に渡来したのは奈良時代。
くわいには、青くわいと白くわい、吹田くわいの3種。青くわいは、最も多く栽培され、外皮が青く、肉質はやわらかく美味。代表的なのは、京くわいと新田くわい。白くわいは、中国原産で、青くわいより苦みが強い。吹田くわいは、小さいので「姫くわい」とも言われる。きめの細かい肉質で、高級料理に使われる。

○味は、ほろ苦さと、ほのかな甘みがある。主成分は、糖質だが、たんぱく質、ビタミンB1,Cも含む。あくが強いから、皮をむいてから水にさらし、米のとぎ汁でゆでてから使う。

○選ぶときは、皮に湿りがあり、青色がさえて、整った球形を。

○お正月のおせち料理に欠かせない。

○地下茎の先端が肥大した塊茎で、一つの根に沢山の子がついている。その姿が、母親が子供を慈しみつつ哺乳しているようにみえる。それを姑にたとえて慈姑という字があてられた。

○平安時代の「本草和名」では、「和名於毛多、一名久呂久和為」「和名久和井、生=水中、澤寫之類也」と解説。

○「万葉集」の巻十と巻十一に、
君がため 山田の沢にゑぐ採むと
雪消の水に 裳の裾ぬれぬ(一八三九)
あしびきの 山沢ゑぐ採みに行かむ
日だにも逢はむ 母は責むとも(二七六〇)
ゑぐ(クワイ)を詠みこんだ若い娘の恋歌がある。

今泉由利

「三河アララギ」について

◇三河アララギ発行所 〒一四・〇〇二二

東京都北区王子本町一・二六・六・A

TEL (〇三) 五九二四・二〇六五

◇URL <http://imaizumi Yuri.jp/>

E-mail yuriimaizumi@jcom.zaq.ne.jp

◇編集・発行 今泉由利・森岡陽子

◇三河アララギ誌は毎月発行します。

◇会員・今まで会員の方。希望される方。

◇会費制 廃止。

◇新しく購読を希望される方 一ヶ年五千円。

◇振替口座 〇〇八三〇・六・五六二二九

◇原稿送付先 〒一四・〇〇二二

東京都北区王子本町一・二六・六・A

今泉由利 宛

◇原稿は毎月末日までに郵送下さい。